

『忘却の報讐』

著：愁堂れな

ill：水貴はすの

『越野』の料理と、日本酒『浦(うら)霞(がすみ)』は岡橋の好みに合ったようだ。しきりに大将に向かって「旨いですね」と繰り返している彼を、内心ほっとしながら見ている自分に気づき、柳井はなんともいえない気持ちになった。

十年前、自分に憧(しょう)憬(けい)の思いを寄せていた愛らしい少年が、今や重要取引先のキーマンとなっている。最近では社内であっても『年功序列』を声高に言う者もないが、社外となつては自分が彼の何級上であろうと、頭を下げざるを得ないのは当然のなりゆきなのだろう。

頭ではわかっていたが、実際にそんな経験をしたことがなかっただけに、これほどの戸惑いを覚えるのだろうか——大将と岡橋の会話に適当に相(あい)槌(づち)を打ちながら、柳井はぼんやりとそんなことを考え、一人酒を呷った。

「へえ、じゃあお二人は中学の先輩後輩で？」

何からそんな話になったのだろう、柳井がはっと我に返ったのは自分と岡橋をかわるがわるに見ながら大将が問いかけてきたときだった。

「ええ、僕が後輩。テニス部だったんですよ」

酔いのためか岡橋の頬は薔薇色に染まり、黒目がちの瞳がきらきらと輝いていた。ふと柳井の脳裏に、十年前の岡橋の顔が過(よ)ぎる。頬を染め、瞳を潤ませていた彼の下肢は自分の手によって裸に剥かれていたんだっけな——体育倉庫の中で重ねた唇の温かさまで思い出してしまい、柳井は慌てて頭を振ってその幻影から逃れると、

「十年ぶりに再会したんですよ」

と、わざとらしいくらい明るい声を出し、大将に笑いかけた。

「十年、そりゃすごい」

大将が大仰に目を剥いてみせる。

「本当にびっくりしました」

言いながら柳井は同意を求めると岡橋の方へと笑顔に向けた。岡橋はくすりと笑うと、

「びっくりしましたねえ」

と歌うような口調でそう言い、手の中の酒を呷った。

「さて、そろそろ行きますか」

カタン、と飲み干したぐい呑みを机に置いた岡橋が、唐突に散会を申し出たのに、柳井は慌てて、

「それじゃ大将、よろしくね」

と請求書を送ってくれという素振りをし、心得顔の彼に頭を下げて、とっとと先に椅子から下り入口へと向かっていった岡橋のあとを追った。

「ありがとうございました」

「またどうぞ」

口々に声をかけてくれる店の従業員たちに振り返って頭を下げているうちに岡橋は

ガラスの引き戸を出て行ってしまった。何を急いでいるのだろう、と首を傾げつつも柳井も彼のあとに続いて店を出る。

岡橋は店の前で待っていて、神楽(かぐら)坂(ざか)へと向かう細い道を顎(あご)で示した。

「少し歩きますか？」

「ああ」

頷いたあと、『はい』と答えるべきだったかな、と柳井はちらと岡橋を見たが、岡橋はなんのリアクションも見せず、のろのろと歩きはじめた。

会うことのなかった十年の歳月が二人の間に越え難い河か何かのように横たわっているのがわかる。後輩として気安く話しかけるべきなのか、それとも取引先キーマンとして、丁重に向かい合うべきなのか——どちらかに態度を決めてしまえば、この居心地の悪さもなくなるのだろうか、と柳井はぼんやりとそんなことを考えながら、無言で足を進める岡橋のあとについて歩き続けた。

どれほど歩いたことだろう、入り組んだ神楽坂の街並みを果たして岡橋はわかって歩いているのか、とさすがに歩き疲れた柳井が声をかけようとしたとき、どこだかもわからない細い路地の行き止まりで岡橋は唐突に足を止めた。右へ行くのか左へ行くのか、それを会話のきっかけにしようと柳井が口を開くより前に、不意に岡橋が振り返ったかと思うと、

「どうしてなんです」

と、柳井をじっと見下ろしてきた。

「え？」

何が『どうして』なのだろう。蛍光灯が切れかけているのか、ちらちらと瞬(またた)く街灯の灯りを受けた岡橋の顔が古い映画のフィルムの一コマのように見える。

「……恨んでました……あなたを」

モノクロのフィルムに映し出されたような岡橋の唇が紡(つむ)ぎ出した言葉は、柳井を驚かせるには充分だった。

「恨む？」

柳井の頭に浮かんだのは、聞き間違いか、という至極当然の疑問だった。街灯の瞬きが大きくなる。一瞬目の前が暗闇に包まれたとき、岡橋は再びはっきりと先ほどと同じ言葉を繰り返した。

「ええ。恨んでいました。あなたを」

「何を……」

言っているんだ、と問いかけようとしたとき再び街灯が辺りを照らした。柳井が呆(ぼ)う然(ぜん)としながら見上げた岡橋の顔は——笑っていた。

「迷ったみたいですね。タクシーを拾えるところまで行きますか」

まるで何ごともなかったかのように笑い、こっちな、などと言いながら岡橋が足早に歩き始める。夢か、それとも酔いが見せた幻か——そう思い込もうとしても、今柳井が聞いた声は紛うことなく岡橋のものだった。一体何が起こったというのだ、と腋(わき)を流れる冷たい汗の不快さに眉を顰めながらも、柳井は無言で岡橋のあとを早足で追ったのだった。

タクシーに乗る岡橋にチケットを渡したあと、去ってゆく車の尾灯を見ながら柳井は

先ほどの岡橋の言葉を思い起こしていた。

『恨んでました』

そんなことを果たして本当に彼が口にしたのだろうか——冷静になればなるだけ、やはり聞き間違いをしたのでは、と思わずにはいられない。

結局彼とは終始敬語で通してしまったな、と柳井は溜息をつくと、携帯の電源を入れ留守番電話が入っていないかをチェックした。接待中に鳴っては大変と切っておいたのだったが、その接待の相手が岡橋だと思うと、後輩にここまで気を遣う自分がやけに卑屈に思えてくる。十年会っていなかったとはいえ、まるで知らぬ仲でもなし、時間をかければまたいい方向に二人の関係を進めていくことができるのではないかと楽観的に考えようとしている柳井の耳にまた、暗闇の中で聞いた岡橋の言葉が一瞬甦(よみがえ)り、消えていった。

本文 p37～42 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>